



特 223

761



第十七篇

死者に交る三十年から

心靈科學研究會

始



特223
761



淺野和三郎編

死者に交る三十年か



發行所 心靈科學研究會



はしがき

本篇收むるところの『地縛の靈の解放』中にもある通り、米國加州のウィツクラント博士は『死者に交はる三十年』なる、可なり大分の著書を公けにして居ります。その著書の中から、故淺野氏は標本的に、四篇を拾つて雑誌に發表したのでした。憑依から來る精神的並に肉體的障害は、幾ど想像に餘るものがありますが、此の標本的のものによりても、大概他を類推するに難くはないと信じます。

本邦にもかうした實例は、枚舉に遑ない程數多くありますが、遺憾ながらそれ等は未だ整理されて居らないので、取り敢へず是れ丈纏めることに致しました。唯本邦での實例には、ウィツクラント博士のやうに、どうしても理解せぬ亡靈を、高級靈に引渡すといふ事が行はれたことを、寡聞にして未だ聞き及ばないのであります。若し本邦の心霊家で、そんな經驗を有せないものがあるなら、今後その方面の研究を進めることも必要となるのでありませう。編纂の次手を以て、右のやうなことを、一つの希望として申述べて置くことに致します。

昭和十四年十一月

編纂者記

目次

地縛の靈の解放……………(一)

憑依と自殺の實例その一……………(七)

憑依と自殺の實例その二……………(一七)

憑依靈と多數人格現象……………(三七)

「死者に交はる三十年」から

浅野和三郎 著

地縛の靈の解放

「地縛の靈」とは、英語のゼ・アースバウンド (The Earth Bound) の譯語で、所謂「浮べぬ靈魂」「迷へる亡者」など、同様な意味を以て使用されて居ることは、爰に申上ぐるまでもありません。

實際問題に觸れない人は、おしなべて斯んなものゝ存在を否定したがりませんが、凡そ天下にこれほど無智な、向ふ見ずの仕打はないでせう。心靈實驗が進歩しなかつた時代には、或はさう考へられても致し方がありませんが、今日では、靈媒を用ゐて地縛の靈を捕へることは、顯微鏡を用ゐて微細な微菌を捕へるよりは寧ろ容易で、且つ正確味がある位であります。現在日本に

も、西洋にも、さうした仕事に堪能な靈媒は、決して尠きを憂へません。

西洋で地縛の靈を捕へるに妙を得てゐる、有名な靈媒の一人は、米國加州カール・ウィックランド醫學博士の夫人で、その詳細は同博士の著述にかゝる『死者に交はる三十年』(Thirty Years Among the Dead)中に忠實に記述されて居ります。一々證明づきの報告で、今更之を否定しようとしたところで、天に向つて唾するが如く、とてもできない相談であります。

ウィックランド博士夫妻は、先般來歐洲大陸を漫遊して、心靈上の講演、並に實驗を行ひつゝ、ありましたが、本年八月英國滯在中には、『ロンドン心靈協會』などでも講演を行つた模様であります。するとウィックランド夫人の靈媒能力は、入英後間もなく活動を起したらしく、右に關する記事が、サー・アーサー・コナンドイルによりて、最近『デイリー・エクスプレス』紙上に報告されて居ります。大要を述べると左の通りであります。――

『某日ドイル氏は、ウィックランド夫妻を携へて、サセックス州の某莊園を訪問した。一と通り舊るい建物を見物して辭去したが、その際ウィックランド夫人の眼に、一人の奇妙な恰好の老人の姿が映じた。彼は餘ほどの老齡で、駝背であつたが、ヨチ／＼一行の後から付いて來て離れようとしな。夫人は言つた。「あれは地縛の靈で、昔この莊園に住んで居たものです……。」』

一行は村の宿屋へ入つて茶を喫んだり、その他諸所を歩るきまはつたりして、日暮漸くドイル氏の住居に戻つたが、その間老人の附いて來るのが、始終夫人の眼に映じて居た。やがて室に入ると、早速老人はウィックランド夫人に憑依して、自分はダヴィット・フレッチャーであると名告つた。段々訊いて見ると、彼は元莊園の管理人であつたが、死後すでに一世紀以上になるらしかつた。そのくせ彼は未だに自分の死んだことに氣がつかず、たゞ誰かに水中に押し込まれたこと丈を記憶して居た。従つて彼は今以て莊園の管理をしてゐるつもりで居るのであつた。ウィックランド博士は、かゝる際に使用する常套手段に出で、彼が最早人間界のものではないこと、従つて眼を靈界に開き、向上の途を辿るべきこと、死んだ以上駝背などは、夙うに放棄すべきこと、其他いろ／＼懇切なる注意を與へたもので、あはれなる靈魂は、死後百年以上を經過した今日に於て、初めて窮屈なる地上の雰圍氣から脱却し、美しい靈界に安住の地を見出すことになつた。彼は死後初めて自分の母の靈魂、その他に逢つて非常に歡んだ。後で莊園の記録を査べて見ると、果して十八世紀の末葉に、ダヴィッド・フレッチャーなるものが、強盜の手にかゝりて非命に死んだことが確かめられた……。

斯んな話は、千百の實例中のたゞ一つで、材料はいくらでもあると言つて宜い位であります。

實に人間の執念、殊に死の瞬間のつきつめたる觀念ほど、強烈に死後その靈魂を束縛し、左右するものはありません。肉體のある人間は、衣食住その他の仕業に屈托し、又感覺の動きに捕へられて居りますので、一意専念、唯一事を思ひつめるといふことは滅多にありませんが、死者の靈魂は、念ふことだけが全生命であり、自から造りあげた狭い、苦しい觀念の世界に閉ぢこもつて、未來永劫同一事を繰り返しく、徒らに時を刻むのであります。これは心靈實驗の明示する所で、推理や想像の所産にかゝる、コジツケ説ではないのであるから、動きが取れません。東西の心靈研究家が聲を噎らして、警世の言葉を絶叫しつゞける所以も、實にさうした確信の上に立つからであります。

ウィックランド博士夫妻の今回の歐洲巡錫が、一般人士に對して、何れほどの感化を及ぼすことになるかは、今のところでもまだ不明であります。兎に角かゝる計畫が、彼地で着々實行され、そして「デーリイ・エクスプレス」の如き新聞紙が、眞面目に之を報道するといふことは、日本ではまだ見られぬ現象で、西洋の方が日本に比して、たしかに一日の長があると謂はねばなりません。その辯日本國に地縛の靈の災厄が少ないかといふに、決してさうではないのであります。殊にかの關東大震災の如き、轉瞬の間に、數十萬の人畜の生命を奪つたことを考ふれば、

いかに浮べない亡者が多いか、想像に難くないと信じます。

「そらつ地震だ！ 大變だ！ あぶない！ 逃げるッ！」

さうした刹那の恐怖に戦慄きつゝ、今猶ほ愛兒を尋ね、愛妻を捜しつゝ、右往左往する亡靈は、いかに鐵筋コンクリートの聳え立つ、復興の都大路に充ちくゝて居るであります。私の實驗の結果も、明らかにさうした消息を物語るものがあります。

「亡靈なんか、いくら騒いだつて構はんぢやないか！ 亡靈は亡靈だ。生きた人間の知つたことぢやない。」

私はよく斯うした放言に接しますが、こんな勇氣は、畢竟無知から生るゝ勇氣で、丁度低腦者がチブス菌だらけの生水を、ガブ／＼飲むのと同様、一向讚める値打がありません。心靈研究の結果が明らかに證明する通り、現幽の間には、密接不離の因果關係が存在し、人間の肉體は、間斷なく幽界居住者の宿泊所となり勝ちなのです。發狂、ヒステリイ、神經衰弱、瘋癲、慢性病、惡癖、出來心、……われ／＼人間は、表面的觀察に基きて、斯んな名稱をくつつけて、済ました顔をして暮らして居りますが、適當の心靈的手段方法を以て、其裏面の消息を探つて見ると、其所にはきまり切つて幽界の落武者、つまり地縛の靈が頑張つて居るのを見出すのであります。

現代の藥物醫學、倫理學、法律、政治、宗教等は、此等に對して、姑息手段以外に、殆んど手を下すべき術を知りません。暴ばれるから拘禁する。眠れないから睡眠薬を飲ませる。衰弱するから轉地させたり、滋養物を食はせたりする。他に迷惑を及ぼすから刑罰に處する。悪いことをするから説法する。死んだから葬式をしてやる。これでも一時を糊塗し得ないではありませんが、根本的社會改良、生活改善は望まれません。

微力ながら私どもなら、も些と奥深く突入して、此等人生の不幸災厄の眞因をほじくり出して、適當に處分することができます。無論日本の心靈研究は、今日漸く整理の緒に着いた丈です。吾々は一方に於て、在來傳統の諸靈術（各派の修驗行者等の修法）を審査して、其の短を棄て、その長を採り、他方に於て新規の靈媒を保護養成して、的確なる幽明の交通を講じつゝ、苦心努力を重ねてゐる最中で、まだ充分安心の域に達して居りませんが、しかし大概の靈的調査なら、先づ遺憾なく遂行し得るところまで漕ぎつけました。その結果最近數ヶ月間に、幾多の重病者が見事に平癒し、幾件かの難問題が立派に解決されました。實驗向きの靈媒では、歐米に比して遜色がありますが、實用向きでは必ずしも劣りません。事によつたら現在では、日本の靈媒の方に、或は少し勝味が見えはせぬかと考へらるゝのであります。

鬼に角幽冥の世界と、人間の世界との間には、案外關係が深く、人生の安危存亡、吉凶禍福は、主として其所から生れ出ると言つても過言ではないのが事實であります。人間が強ひて眼を瞑つて、無知によりて一時の安心を獲ようとするのは、たゞ損の上塗りをする丈のことで、一向詰らない、幼稚至極、愚劣千萬な話であります。それも昔のやうに、頭から只かく信ぜよと迫るのなら、其所に無理が伴ひますが、二十世紀の心靈研究は、未だ曾てそんな事を何人にも強ひようとはしません。現在はこれ／＼の靈媒が居り、これ／＼の方法によりて、これ／＼の結果を擧げて居るのだから、公平な見地でよく查べた上で、お互に事實を事實として認めるの雅量有たうではないか。これは決して他事ではない、直接御互の身の上にかゝる問題だから、一時も早く適當の方法を講じようではないか。——たゞさう主唱する丈なのであります。まさかこの正當なる主唱が通らぬほど、暗い日本國ではありますまい……。 (昭和二・九・二〇)

憑依と自殺の實例

その一

世間には何の爲めの自殺か、外面的にはさつぱり譚の分らぬものが少くありません。そんな場合には、大方氣でも狂つたのであらうとか、何か世の中を悲觀したのだらうとか、いゝ加減の理窟をくつつけて、有耶無耶に葬つて了ふのを常としますが、一たん適當な靈媒を据ゑつけて、其裏面の消息を探ると、その大部分が憑依靈の仕業であることが明らかに突きとめられます。憑依靈の種類は大別して二つに分れます。即ち

(甲) 是非とも相手を^{たを}登さうといふ目的で憑つて來るもの。

(乙) 戸惑の結果偶然に憑つて來るもの(換言すれば自殺した者の靈魂が、死後自己の意識が繼續して居るのを見て、てつきり自分は自殺し損ねたものと勘違ひし、他人の肉體に飛込ん

で來て、自殺行爲を續行するの類)

自殺は一般に罪の深いものとして、何れの宗教に於ても大てい之を排斥しますが、心靈實驗の結果も、これを裏書します。自殺者の靈魂は大てい地縛の靈として娑婆にうろつき、自分が勝手に縮めた丈の期間を、その状態で送るべく餘儀なくされるやうです。この種の靈魂に憑かれた人間は、まことに災難で、自然その陰氣な思想にかぶれます。

私はこれからウィックランド醫學博士の數ある實驗の中から、参考になるものを二三抄出して紹介する事にします。何にしる博士夫人(アンナ・エム・ウィックランド女史)は、この種の實驗にかけては、恐らく世界隨一の好靈媒で、前後三十年間も良人を助けて、そればかり行つてゐるのですから、その實驗記録中には、なか／＼立派なものがあります。私自身の實驗中にも、面白いのが少くありませんが、それは後日一とまとめにして、整理の上に發表することにして、當分外國の實例中の優れたものから、先づ皆様にお目にかけるつもりであります。

X 夫人の自殺

X夫人は、ウィックランド博士が少年時代を英國で過して居る時分に、日曜學校の教師だつた

もので、ウィックランド夫人とは一面識もなく、夫人はX夫人の存在さへも知らずに居たのでした。

X夫人は惘發で、精神的で、幸福なる結婚生活に入り、二兒の母として、何不足なき身分の人でした。ところが彼女は、一見幸福と満足の絶頂に於て、ダシヌケに首を絞つて自殺を遂げました。愕いたのはその良人と子供達とで、何故の自殺なのか、頓と推定さへつかないのです。

ところがX夫人が自殺してから、約十ヶ年を経過したある冬の日、シカゴの自宅に於て、ウィックランド夫人は、急に神憑状態になりました。その憑靈は氣息がつかまつて、しきりに悶き抜いてゐる状態をつゞけるのです。靈媒に憑依する事に慣れた憑靈は、最初からそのつもりで居るから始末が宜いが、初めてこの經驗をするものは、他人の軀と自分との見境がつかず、突然物質的肉體に接觸したはづみに、普通その臨終の際の悶えを繰り返します。

ウィックランド博士は、斯んな事には慣れ切つて居ますから、直ちにその憑依靈に向つて姓名を訊ねますと、意外にもそれが十年前首をくゞつて自殺を遂げた、ロンドンの舊友であることを發見しました。彼女はその時まで、地縛の憑靈として残り、十年間に嘗めさせられた精神的苦痛は、實に言語に絶するものがあつたのでした。

X夫人の靈魂は斯く物語りました。――

『私は自分の軀から脱け出た瞬間に、初めて何故あんな向ふ見ずのことをしたかといふことに気がつきました。他人の嫉みから、私の身に付き纏ふことになつた惡靈ども――そいつ等が私の傍に佇つて、さも得意らしく、齒をむき出して嘲つて居るではありませんか！』

『私が自殺したのは、全く其奴達の仕業で、ツイうっかりした隙間に、イタヅラをされて了つたのです。私は不可抗力の一の衝動に驅られて、夢中で首の周圍に紐をくゞりつけたのです。これは可けないと氣がついた時には、モウ手遅れでございました……』

私は若しモ一度自分の軀を取りもどすことができれば、何んなことでも致したいと思ひました。私が經驗した絶望と、後悔との十年間の苦しみ！ 家庭は碎け、良人は落膽、二人の子供達は、母を尋ねてさびしさに泣いてゐます。私は何時も彼等の傍に行つてゐたのですが、先方ではむろんそんなことには少しも氣が付きません。その間の私の胸の暗さ、苦しさ……』

ウィックランド博士は、何時もするやうに、X夫人に向つて、靈界の眞の生活に就きまして諄々と説明を試み、一時も早く心の闇を披いて、信仰の光明を求むるやうにさとしみますと、元來判りのよい靈魂ですから、直ちに悟りの扉が開けそめ、靈界の指導靈に就きて、まことの教を受

け、ドウすれば地上に残せる愛する者に對してお役に立ち得るかを、眞心から研究することになりました。

それから幾年か過ぎた時、ウイツクラント博士の所に、一人の自殺癖のある患者が來ますと、X夫人の靈魂が再び戻つて來て、博士夫人の口を借り、右の患者に向ひ一場の訓戒を試みました。左にその全部を紹介します。

何事ありても自殺はするな

(一九一八年十一月十七日の實驗)

「随分永いこと御無沙汰を致しました。——こゝにお在いでの御婦人は、しきりに自殺しようと考えて居られますが、それに就きて、私からちよつと御忠告申し上げたいと思ふのでございます。

「實は私自身も元は幸福な人妻でございました。可愛い子供が二人もあつて、良人はこの上もなく親切……。それに夫婦とも快活な性質でございますから、人に羨まるほど圓滿な家庭を作つてゐました。が、人生は何所に不幸の種子が潛んでゐるか知れません。家庭の圓滿が、却つてある人の嫉視の標的まじにされたのであります。

「その時分の私は浸禮教會に屬し、自分が靈媒的の感受性を有つてゐようとは、些つとも存じませんでした。で、私は家庭の主婦として、ひたすら家事に没頭して居たのですが、ある人が、ひそかに邪道を用ひて、私達の家庭を傷けることに着手しました。ある日私は仕事に出掛ける良人を送り出し、大へん愉快な氣持で家に居たのですが、急に變な氣分……。何物かに全身を占領されたやうな氣分になり、それつきり何が何やら、さつぱり判らなくなつたのでした。

「むろん私は自分が何をして居たのか、些しも記憶しません。それは全く夢中なのでした。たゞ誰かにグイと掴まれたやうな、不思議な氣分だけが、かすかにあつたやうに思ひます。

「が、しばらく過ぎますと、すつかり様子が變りました。一ばん早く氣がついたのは、私の良人が、いふに言はれぬ悲痛の色を浮べて、男泣きに泣いてゐる光景でした。それから意識がモ些し明らかになつて來た時に、私は自分の軀が、ブラリと梁から吊り下つてゐる光景を認めました！

「その時の私の心持は、とても皆様にお傳へすることはできません。良人は垂下せる私の屍骸を眺めながら、ボンヤリ其所に佇たつてゐます。その兩眼からは、涙が雨のやうにはふり落ちますが、私には良人をドウ慰める術もありません。能きることなら、モ一度自分の冷たい體内に戻り

たいと思ひましたが、そんなことはモウ後の祭り……。二人の子供等も、私の變つた姿を見て泣いてゐますが、人間でなくなつた私には、それをドウすることもできないのです。

『最初私は、何故斯んなことになつたのか、些つとも見當が取れませんでした。二、三の悪靈どもが、すぐ傍で、私を見て嘲り笑つてゐるので、初めてそれと氣が付ききました。彼等は私の軀を占領して、私に首をくゞらせ、家庭の幸福を碎いて了つたのです。』

『私の良人は、その後永久に物置の梁からブラ下つてゐる私の首吊姿を忘れることができませぬ。子供達はまだ稚いので、何よりも母の扶けを要するのですが、その養育の任務は、良人の手一つにかゝり、私は蔭からそれを見てゐる丈で、あゝ濟まない〜と思ひつゞけるより外に致方ありませんでした。』

『私の自殺は、單に悪靈の憑依の結果で、その他に何の過失はないのですが、それでもまるまる十年間といふもの、私の眼に映るものは、たゞあの時の光景のみでした。ブラリと垂下した醜しい自分の肉體、絶望せる良人と泣き叫ぶ二人の子供……。その苦痛はとても言葉には盡せませぬ。』

『丁度十年間経つた、ある冷たい冬の日、私は何やらモ一度娑婆へ戻つたやうな氣がしまし

た。私はボカリとした軀の温みを感じました。それが何所であるのかはよく判りませんが、ドウやら人間界には相違なく感ぜられました。言葉くちをきいて見た時に、初めてそれがウイックランド博士の所であることが判りました。博士のお話で、私は初めてウイックランド夫人のお軀を一時拜借してゐること、それから一切の現世的迷妄を振り棄て、眞の靈的生活に入り、自他の利益を圖らねばならぬことを悟らせて戴きました。

『それからの私の境遇は、ずつと改善されました。今日私が靈界の美はしき境涯に安住することの能きますのは、皆博士並に博士夫人の献身的指導の賜であります。』

『しかしそれまでの十年間の苦痛悔恨！ 垂下せる醜しき死骸……人生の悲慘に泣く良人と二人の子供とのあはれな姿……。眼には見えても扶くる途も、慰める術もなき私の心の苦しみは、何れほどでありましたらう！』

『で、私は衷心から自殺を計る所の一切の人々に向つて、警告したいと存じます。——
何事ありとも、自○殺○ば○か○り○は○な○さ○い○ま○す○な○！』

『あなたは何にも御存知がないので、今自殺しようとして居られますが、それは御自分の入る地獄を造り上げるのです。一たん軀から出脱けた上は、モウ二度とその内部なへは戻れません。そ

れつきり御自分の務めを果たすことができなくなりませう。

「何よりも先づ、私の子供等のあはれな身の上を考へてください。自分達の母親は自殺をしたのである、といふ考へから、終生離るゝことができないではありませんか！ 私の良人も、又子供等も、決して心から私を恕す氣にはなれません。縱令それが憑靈の仕業であつて、自分自身の心から出た仕業ではないにしても、私はあんなに苦しまねばなりませんでした！

「若しもあなたが、眞に靈界方面の法則を御存じならば、あなたは決して自殺しようとはなさらないでせう。その結果が實に恐ろしいからです。是非その忌はしい考にだけは打勝つてください。自然にあなたが靈界に入らねばならぬ時節の到着するまで、この地の世界で幸福にお暮らしなさいませ。

「私が苦しみ抜いた十年といふ歳月は、私が無理に縮めた期間でした。あの十年を地上で過した上で、私は靈界の人として、又母として行る丈の任務を首尾よく果した上で……。

「靈界には靈界の嚴律がございます。自分に與へられたる期間を、現世に過ごした上でなければ、自分ぎめに靈界には入れません。私は私の過失に對する刑罰として、十年の間、間斷なく自分の眼に、自分の醜しき屍骸の垂下してゐる狀況を見せられました。そしてその間、私は自分の

良人と、子供等とが何んなに困つてゐるかといふ事を忘るゝ隙とてありませんでした。

「私は目下相當に幸福でございますが、眞の幸福は、靈界で自分の愛する家族と再會する時でなければ味はれません。私はそれまで、こちらから子供達を助けるべく全力をさゝげて居ります。

「良人には博士から私の愛を傳へてください。良人はいつも一人ぼつちと思つてゐますが、實は私がいつもその側に居るのです。側に居りますが慰めることも、手助けすることもできません。

——これでお告別致します……。」（大正十四年・十二）

憑依と自殺の實例

その二

一、地縛の靈魂

前章に引續きて、憑依靈と自殺に關する新實例を紹介します。例によりて、ウイックランド醫學博士、並に同夫人の數ある實驗の中から、適當と信ぜられるものを選びますが、御承知の通り、同夫人は地縛の亡靈を憑らせるに、誠に洩向きの好靈媒で、自由自在に、現幽兩界の連鎖を講ずる手腕は、殆んど前代未聞と言つて差支ないと存じます。憑靈現象の實地を知らぬものは、ちよつと腑に落ちかねる處があるかも知れませんが、その理論は一度腑に落ちれば、比較的簡單であります。豫ね／＼申上げます通り、靈媒は一の生きたる器械であります。たゞ生きて呼吸して居る丈で、多くの場合に於て無意識であり、常人の個性は、可及的混入せぬを以て原則としま

す。さうして置いて、此生きた器械を、當人と全然無關係の、他の靈魂に貸すのでありますから、その人の人格とは、全然異つた別人格が現はれて、或は言葉をきゝ、或は文字を書きます。心理學者は、その別人格の處置解釋に困り、苦しまざれに潜在意識だの、暗示説だのを提唱します。幼稚劣弱な靈媒の場合に於ては、潜在意識説位で、曲りなりに説明がつきますが、ウイックランド夫人見たいな、優秀的確な靈媒になりますと、死者の靈魂の個性が歴々として現はれ、幾らでも動きの取れぬ證據を挙げますから、潜在意識説や、暗示説では、到底説明がつかぬ事になつて來たのであります。潜在意識説も、暗示説も、過去の詐術たツぶりの似而非靈媒を撲滅掃蕩するには、大なる効果がありました。イヤ日本のいかゞはしい靈媒現象に對しては、現在でもまだ頗る有効な武器であるかも知れません。しかし時代は急速に進展しつゝあります。現在の世界の心靈學は、そんなものでおさへつけられるには、餘りに長足の進歩を遂げて了ひました。いつまでも弓矢や竹槍で戦争はできません。今頃尚ほ眞面目くさりて暗示説やら、潜在意識説やら一點張りで騒いでゐる連中を見ると、他人事ながら冷々いたします。

前にも申上げた通り、ウイックランド夫人に憑つて來る靈魂は、その殆んど全部が地縛の亡靈であります。この種の靈魂に就きては、讀者の方で、ある程度の理解を有つことが肝要であり

ます。「死」は決して罪深き者を聖者にするものでもなく、又賢者を愚物にするものでもありません。死者の精神状態は、生前から引續いて、その希望、習慣、意思、僻見、迷信等を持ち越してゐるのが多数であります。生きてゐる人間は、死を恐るゝこと蛇蝎の如く、且つそれに神祕的色彩を帯びますが、實際死んだ者の告白等から推定すると、死ぬることは案外に自然的なもので、物質的肉體から脱出した人達の多数は、自分の死んだことに氣づかず、何やら勝手が少々異つて来たナ、位にしか考へて居ません。一方に於て物質的感覚を失つて居るから、今迄のやうに物質界の事情も分らず、他方に於て死後の世界の規律法則を知りませんから、精神的にも盲目であつて、無自覺な死者の靈魂は、随分憐れむべき状況に沈淪して居ります。そんな亡靈達が、普通多くは地の世界の雰圍氣の中にマゴ／＼して居る所の、いはゆる地縛の靈魂となるのであります。

サツと上層の靈界まで進んだ靈魂達は、間斷なく地の世界に降りて此等地縛の靈魂達を啓發すべく努力するやうですが、困つた事には、兩者の距離が餘りにかけ離れ過ぎて居るので、所謂大聲俚耳に入り難き憾があり、且つ亡靈の多くは、死は滅亡だといふ間違つた先入觀念に捕へられて居るので、好意を以て自分を迎ふる先輩の靈魂を、何やら怪しい一つの幻覺である位に考へ

て、容易に信賴せぬ傾向が多いやうです。斯んな連中は、むしろ之を靈媒の軀に憑依せしめて、心靈上の知識ある人間の手で説諭した方が、却つて餘程效能が多いやうに見受けられます。ウィツ克蘭ド博士は、よく其間の呼吸を諒解し、常に諄々として亡靈の説諭を試み、多くの場合に於て、驚くべき良成績を擧げて居ります。

地縛の亡靈の一番厄介な點は、物質的肉體を失つてゐるくせに、生前の物質的慾望が、依然として残存して居る事で、彼等の爲めにも、又人間の爲めにも、飛んだ迷惑な現象が起ります。外でもない、それが憑靈現象であります。人間の軀からは、一の磁氣的光線を放射します。それが所謂靈衣レイであります。亡靈達はこの光に引きつけられて、意識的又は無意識的に、靈衣の中にとび込み、そして次第に、其人間の思想感情までも左右します。ヒステリイ、發狂、惡癖、その他不健全なる性質がかくして發生します。古來「惡魔」扱ひを受けたのは、多くは此等地縛の靈魂のやうで、惡魔は惡魔ですが、個々の慾望、迷信、無智等から發生した人間お手製の品物であります。

從來人類間に發生せる不幸災厄の大部分、又原因不明の不可解の事件の多くは、此等の肉體のなき幽界の居住者のイタヅラであります。正直とか眞心とかは、甚だ結構なものに相違ないが、

それ丈では、必ずしも憑依の防禦にはなりません。此等の問題につきての完全な知識——これが何よりたよりになる金城鐵壁であります。

肉體の缺陷も、勿論ある程度までは、悪靈から憑依さるゝ原因となります。即ち生來襲はれ易き體質、神経系統の缺陷、不意の驚き等がそれであります。又一般に軀が衰弱して居る場合には、抵抗力が薄弱なので、兎角彼等のつけ込みどころとなります。

今回の説明は、この邊で一と先づ切り上げて置きまして、次に實例を紹介することにします。

二、お婆さんになる丈は眞平

R夫人は自殺癖のある狂人で、食物や睡眠を取らず、間断なく頭髮をかきむしり、骨と皮ばかりに瘦せて了て了ひました。到底醫術を以て回復の望みはないものとせられ、まる／＼三年間某精神病院に監禁せられました。

この患者が縁あつて、ウイックランド博士の治療を受けることになつたのであります。最初は幾度も自殺を企てましたが、數週にして彼女に憑依せる一人の亡靈——それは自殺した男の靈魂です——を驅除しますと、それツきり自殺の衝動が止み、しばらくしてズン／＼健康體に復し、

今日では、心身共に立派な人間となりて家族と同居し、以前の職業を営みつゝあるのであります。これがウイックランド博士と、右の亡靈との問答です。——

時 日——一九一九年二月二十二日

亡 靈——レエフ・ステイヴンス。(R夫人に憑れる男の亡靈。)

靈 媒——ウイックランド夫人。

審査人——ウイックランド博士。

博士。あなたは何地どこからお出でになりましたか？

亡靈。あちこち彷徨さまよつて居る中に、光が見えたからやつて來ました。

博士。お名前を一つきかせてくれませんか？

亡靈。名前……。そんなものは知らない。

博士。あなたは御自分の姓名を記憶して居ないのです？

亡靈。私ア何一つ記憶して居ないのです。頭腦が變挺で、考へることがさゞぱり能きなくなつて了つたのです。一體私は何の用事があつて爰に居るのでせう。あなたは何誰です？

博士。私はウイックランド博士といふものです。

亡靈。何の博士です？

博士。醫學博士ですよ。——あなたのお名前をきかせてくださいナ。

亡靈。名前には弱つたナ。妙な話だが、ドウも私は自分の名前が想ひ出せないので……。

博士。あなたは死後何年になりますか？

亡靈。死後ですツて！ 御冗談仰ツしやい。私ア死んではゐません。死んで居るなら結構なのが……。

博士。あなたは生きてゐるのが餘程厭だと見えますぬ？

亡靈。厭ですとも！ 私ア何度も／＼死なうとしたのですが、その都度必ず生き返つて來るのです。何故私には死ぬことができないのでせう？

博士。眞の死といふものはありアしませんよ。

亡靈。無いことは無いと思ふが……。

博士。ドウしてさう思ふのです？ 何か正當な理由がありますか？

亡靈。理由なんか知るもんですか！（萎れ切つて）私アたゞ死にたいのだ／＼！世の中といふものは、實にイヤな陰氣なところだ。私ア死にたい。死んで何も彼も忘れて了ひたい。何うして

それができないのかしら……。時々はこれでも死んだやうに思ふこともあるが、早速生き返つて了ふには弱つて了ふ。私ア早くこの苦痛悔恨からのがれたい。何所へ行つたら立派に死ぬことができるかしら……。そり私だつて、とき／＼明るい場所（靈衣）へ出ることもあるが、すぐに又暗闇の中へ突ツつき出されて彷徨きはじめる。何所へ行つても、自分の永住の場所が見つからず、又死ぬこともできない。何うにかしてこの暗闇から脱れる工夫はありませんか。

博士。君は迷つて居るのですね。

亡靈。さうでせう？ 何所かに本當の道があるでせうか？

博士。本當の道は自分の心にあります。

亡靈。私だつて、これでも元は神様を信じました。天國や地獄を信じて居ました。しかし今は駄目です。私アたゞ忘れたい丈です。一切を忘れ、自分の存在までも忘れたいのです。

博士。あなたは自分の肉體が失せたことは知つて居るでせうね。

亡靈。そんなことは知りません。

博士。それなら何故爰に來て居ます？

亡靈。何故ですかねえ。私アあなた方の姿を見ますが、一人も知つた顔はありません。しかし、

あなた方は何れも皆親切な顔をして居られる。ドーか私に少しの光と、慰安とを恵んでください。私は何年となくそれ等に離れて居る。

博士。一體あなたの苦痛は何が原因です？

亡靈。世の中には神様は無いのでせうか？ 何故私はこんな暗闇の中に放り込まれてばかり居るのでせう？ 私だつて最初からの悪人ではありません。——尤も私は……私は。あなた方にそればかりは言れない。私は死ぬより外に道はない。死にたい……！

博士。何んでもいゝから、あなたの思つてゐる事を残らず言つて御覽なさい。

亡靈。私は悪い事をしたのです。神様だつて私のやうなものは、決して宥してはくれません。とても駄目です。とても……。

博士。あなたは氣を鎮めて、現在ドウなつてゐるか、よくそれを了解せんと可けません。あなたは御自分では、當り前の人間のつもりでせうが、實は現在一人の婦人の軀を使つてゐる幽靈なのです。

亡靈。冗……冗談仰ツしやい。いかに私がとぼけて居ても、自分の驅が婦人になるのを知らずに居るものですか！ (この時ある靈魂の姿を見て急に昂奮する。) これ！ 來やがつたナ……！

あツちへ行け！ あいつが……！ とても耐らない。

博士。あなたは何んな罪を犯したのです！

亡靈。そればかりは言はれない。そんな事を言はうものなら、すぐに捕縛されて了ふ。——私アモウ爰には居られない。逃げよう……！ 斯うして居ちやとても駄目だ！ あいつが追ひかけて來て縛らうとして居る。逃がしてくれエ！ (患者のR夫人は今まで何回となく逃走を企てたのです。)

博士。あなたは目下何所に居ると思つて居ます？

亡靈。ニューヨークに居る。

博士。違つて居ますよ。あなたは目下加州のローサンゼルスに居るのです。それからあなたは、

今年は何年だと思つて居ます？ 一九一九年ですよ。

亡靈。一九一九年？ そんな筈はない。

博士。何年だと思つてゐるのです？

亡靈。一九〇二年です。

博士。それは今から十七年も昔のことです。あなたはモウ肉體のない人間……イヤ幽靈です。世

の中に眞實の死といふものはありません。亡くなるものはたゞ肉體だけです。あなたは生前心靈問題を研究したことはないですか？

亡靈。ありません。私アたゞ神さまを信じた丈です。——さう／＼私の名はレエフといふのです。姓は忘れしました。私の父親は死んで居ます。

博士。つまりあなたと同じことになつて居る丈です。

亡靈。違ひます。私ア死んではゐません。私ア早く死にたい。どうか何所かへ連れて行つて殺してくれませんか。あれ／＼！ 彼奴等が又追ひかけて来る。捕まつちや大變だ！ この上監獄へでもブチ込まれて耐えるものか！

博士。ドウもあなたは無智の爲めに、心の眼が開けて居ないのだ。懺悔なさい。さうすれば助けあげます。

亡靈。懺悔などはできません私には……。前にも試みたが、できずに了ひました。私の過去は、私の眞正面にはツきり浮き上つて見えます。

博士。先刻からいろ／＼伺つたところで想像すると、ドウもあなたは他の人間に憑依し、自殺するつもりで、それ等の人達の生命を幾人も奪りましたネ。時々あなたは、何やら變な場合に臨

んだことがあります。

亡靈。ドウだか私には判りません。又判らうとしたこともありません。(喫驚して)アレ！ 彼所にアリスが居る！ アリス、勘忍してお呉れ、私はそんな所思ではなかつたのだ。勘忍しておくれ……。

博士。自白なさい早く……。さうすれば助けてあげます。

亡靈。實はアリスと心中するつもりで失策つたのです。アリス、お前は何故私に殺して呉れと言つたのだ？ 何故あんなことを言つて呉れたのだ！ 私ア最初お前を殺し、それから自殺を圖つたのだが死に切れなかつた。アリス、アリス！ 勘忍してお呉れ！

博士。そいつア少し違つて居る。女の方があなたより少し譯が判つてゐるやうだ。

亡靈。アリスは「あの時は莫迦な眞似をした。」なんて言つて居ます。私はすっかり事情を打ち明けても構ひませんが、さうすると捕縛される處がある……。

博士。私が請合ふ、大丈夫捕縛されはせん。早く自白なさい。

亡靈。實はアリスと私とは、夫婦約束をして居たのです。ところが彼女の両親は、私の事を見込めない人間と見くびつて、結婚を許してくれません。むろん二人は惚れ抜いてゐる仲ですか

ら、それならアリスを私の手にかけて殺した上で、自殺しようといふ事になつたのです。——で、たうとうそれを決行したのですが、私アドウしても死に切れません。アリスも爰へ出掛けて來るところを見ると、多分死損ねたかと思ひます。兎に角私は、何時も彼女から責められてばかり居ます。

博士。何うして死損ひをしたと思ふのです？　あなたが手を下して、アリスを殺したではありませんか？

亡靈。むろん殺しました。ピストルでアリスを射殺し、續いて自分を射ちました。が、私はアリスが床の上に横はつてゐる状況を目撃すると、耐らなくなつて起き上つて、その場を逃げ出しました。それから私は、年から年中走り続け、逃げ続けで、一生懸命になつて、一切を忘れようとして居ます。しかしドウしても駄目です。時とすると、アリスがひよつくり私の所へ出掛けて來ます。其様な場合には、私は何時も『アリス勸忍して呉れ。私がお前を殺したのだ。迷つてくれるナ。』と言つて逃げます。さうしてゐる中に、時々變な事が起ります。先日などは、何やら自分が一人のお婆さんになつたやうな氣がして、ドウしても仕方がないので、時々その癖が脱けて自分に戻ることもあるが、やがて又お婆さんになつて了ふのです。

博士。あなたはその間他人の軀に憑依して居たのですよ。

亡靈。憑依？　憑依ツて一體何の事です？

博士。聖書の中に汚れた靈魂の話が出て居ませうが。

亡靈。ありますナ。兎に角私アお婆さん時代に、自殺したくてしやうがなかつたが、何うしてもそれができませんでした。そのお婆さんが、又どこまでも私の身邊に付き纏つてしやうがない。あれには全く弱りました。モー／＼婆さんだけは眞平御免です。（昂奮して）アリス、お前は此方へ來ちや可けない！　お負けに婆さん時代には、時々電氣が起つて、パツ／＼と火花が出るので困りました。とても助からないと思つたことが、何度あつたか知れません。丁度それは雷が落ちて感電したやうな感じですが、そのくせ死にもしませんでした……（ウイツラント博士が患者に電氣療法を試みたことを指すのです。不淨な亡靈は、電氣療法には餘ほど手古摺るやうです）。

博士。あの火花は、私が患者の治療に用ゆる靜電氣から出るのです。あなたは確かに右の患者に憑依中、その電氣に感じたに相違ありません。さう言へば、丁度あなた見たいに、あの患者は自殺ばかりしたがつて困りました。幸ひ電氣の力で、あなたは患者の軀から追ひ出されて、現

在は臨時に、私の妻の軀に這入り込んで居ます。これで患者の病氣も治り、又あなたも救はれることになるでせう。

あなたが爰を立ち去ることになれば、アリスの靈魂があなたを導き、周圍の狀況が初めて明白になつて來ます。あなたは今でも肉體のなくなつたことを自覺せず、依然として生きて居るものと勘違ひして居ます。アリスだつてあなたと同様、今は靈魂です。人間の靈魂と精神とは、永久に滅亡はしません。

亡靈。斯んな身の上でも、私は心の平和を見出すことが能きるでせうか。私は一時間でもいいから、平和を味はひたいのです。

博士。あなたの前途には、永遠の平和があります。

亡靈。でも私の罪が宥されるでせうか？

博士。眞の懺悔と悲哀とが、あなたの胸に發生すれば罪は宥されます。辛抱しなさい。辛抱して努むれば助けが來ます。

亡靈。(昂奮して)アラ！私のお母さんがあそこに居る！ お母さん！ 私はあなたの悴と呼ばれる丈の價値はありませんが、愛情はかほりません。(泣き乍ら)お母さん、どうか勘忍し

てください。この出來損ねの悴の罪をゆるして、ホンの一時でもいゝから幸福にして下さい。

私ア……私ア随分苦んで來ました。若し私の罪を宥せるならば、どうか一緒に連れて行つて下さい。後生ですから……。

博士。あなたのお母さんは何といはれます？

亡靈。お母さんは、『母の愛は他の何物よりも強い。今までだつて、お前の所へ近寄らう』としたのだが、お前が逃げてばツかり居るので困つてゐた。』と申して居ます。

レエフ・ステイブソンと稱する亡靈との問答はこれで終るのです。すると入れ代つて、彼の亡母の靈魂がウィックランド夫人の軀に憑つて、次の文句を述べたのです。

三、亡母の注意と謝辭

私はこれでやつと、自分の悴と一緒にすることができました。これまでも、何遍さうしたいと思つたか知れませんが、それが能きずに居たのです。私が近づかうと思念する毎に、悴はいつも逃げ出すのです。何故さう私を恐がるのかといひますと、日頃人間が死ねば滅びるものだといふ、間違つた教をきかされて居たからです。人間が死者を恐れるのは、主に其所から來て居りま

す。

われ／＼人間は、死ぬるといふことはございません。たゞ死と稱する一つの關門を越えて、別の世界に進み入る丈です。その眞理さへのみ込んで居れば、死後の世界は、實に美しい境涯です。しかし人間は地上の生活をして居る時から、來世に關する知識を、少しは蓄へて置かねばなりません。

何卒あなた方は、御自身並に人生に就いて、充分に研究していただきます。さもないと、私の悴のやうな目に遭ひます。彼は何年間か、たゞ逃げることはかり考へて居ました。私を見ても、又自分の愛人を見ても、たゞ一生懸命に逃げました。

それから悴はしばらくの間、一人の老婦人に憑依して居たこともあります。ドウすればその靈衣たまげの中から脱出し得るかを知らないのです、いつまでも其所に滞在して居たのです。一口にいふと、悴は地獄に入つて居たのです。但しその地獄は、あの宗教で教ゆる火の地獄ではありません。自分の無智から造り上げた一種の地獄なのです。

何卒皆様は來世の狀況を研究して置いて、死後の準備をなさいませ。死といふものはダシヌケに來るものですから……。その準備はたゞの信仰では可けません。眞の知識が必要です。死の黒

幕の彼方に何かがあるか、よくそれを調べて置いていただきます。さうすれば、いよく時節が來て、次の世界に歩み入る時にマゴつきません。自分の行先がよく判つて居ますから、私の憐れな悴のやうに、地縛の靈魂とならずに済みます。

可哀さうに私の悴は疲れ切つて居ります。精神的の大病人であります。これから私がよく看護してやつて、永遠の生命の何物なるかを教へ、靈界の美はしき境涯をはつきり會得させてやりま

す。
く。れ。く。も。た。ゞ。信。ず。る。こ。と。は。禁。物。で。ご。さ。い。ま。す。た。ゞ。信。ず。れ。ば、そ。の。場。所。に。固。着。し。て。一。歩。も。進。め。ま。せ。ん。ま。た。わ。れ。／＼は。他。の。爲。め。に。生。き、他。の。爲。め。に。盡。す。こ。と。を。忘。れ。て。は。な。り。せ。ん。さ。う。す。れ。ば。靈。界。に。入。つ。た。と。き。に。幸。福。を。獲。ら。れ。ま。す。こ。れ。が。幸。福。を。獲。る。爲。め。の。秘。訣。で。ご。さ。い。ま。す。

あなた方が私の悴に與へられた御援助に對しては、お禮の辭もムいません。母性愛は強いものです。次回に悴があなた方にお目にかゝる時までには、キツと立派なものにしてお目にかけます。悴を苦しめるものは疑惑の念です。疑惑は人間が生死の中間に自分自身で築くところの障壁です。この障壁の存在する間は、母子でさへも一緒になることができません。

悴は現に私の姿を見る毎に、私を避けました。アリスも、私も、悴に近寄ることができません

でした。悴はてつきり自分は生きて居るもの、自殺し損ねたものと思ひつめて居ました。曩日一人の感受性の強い婦人と接觸して、その軀に憑依して居た時などは、當人は監獄に入れられたものと勘違ひしてゐました。

くれぐれも今回の御援助につきましては御禮を申上げ、御事業に對して、神の冥助の下ることを祈願します。

これでおわかれ致します。(大正十五、一)

憑依靈と多數人格現象

一、暗示説其他を包容する靈魂説

潛在意識説、暗示説、人格分裂説——此等は唯物主義の心理學者が、靈魂論を打破する氣組で、氣張つて提唱した所の學説であります。火のない所に煙は立たないの道理で、此等の學説が、部分的眞理を包蔵して居ることは疑ふの餘地がありませんが、部分的眞理は、總體的眞理ではありません。「人間は醜惡である。ハラワタがあつたり、肛門があつたりするから……。」この言葉に、部分的の眞理があるとしたところで、それが決して統體としての人間を醜惡化するものとは思はれません。潛在意識説や、暗示説は、いくらそれが成立したところで、靈魂の存続、死後の世界の存在、又憑靈現象の事實を、一分一厘搖がすことはできません。心靈科學は、人生統體の眞理を窮むる所の廣い學問で、此等の部分的の主張や主義で、いかんともすることは能き

ませぬ。潜在意識は、ある程度働くものである。暗示はなか／＼有力なものである。人格分裂は不健全な頭腦の所有者に見受けらるゝ、悲しむべき現象である。——しかし依然として人間には靈魂があり、その靈魂は死後までも残り、そしていろ／＼の心靈現象を生むことに何の變りはない。

心靈科學は潜在意識説や、暗示説や、人格分裂説の對手ではない。それ等のものを樂に包容して、綽々として餘裕あるのである。

すべてのものは、その分に應じたことをせねばなりません。潜在意識説や、暗示説には、その爲すべき職分があります。警察官や、普通教育者や、開業醫や、民衆政治家やの用具となつて、迷信打破を叫んだり、坊やは善い兒を言ひきかせたり、我黨萬歳を唱へたりするには、この上もなく調法な武器であります。われ／＼は此等の武器が極度に善用さるゝ事を、ひたすら渴望するものであります。が、彼等がその埒を越えて、分不相當の眞似をする時に、黙過する譯にまゐりません。現に暗示説をヘタに呑みこんで、治るべき患者を見す／＼殺したり、潜在意識説をワルく勘違ひして、眞信仰の破壊を試みたりするものが現はれてゐます。況んやこの種の部分的眞理を振りかざして、統體的の心靈科學に反抗せんと企てるに至りては、その分を知らざるも甚だし

いと謂はねばなりません。

ウイックランド博士夫妻が、三十年間の撓みなき實驗中には、靈魂の存續、並に憑靈事實の正確なることを證明する實例が無數にあります。憑靈が變るにつれて、夫人にはいろ／＼の現象が起つて來ます。彼女は二ヶ國の國語（英語とスウェデン語）しか知らないのに、一回の實驗中に、六ヶ國の國語を流暢に喋つたことがあり、又その表情が、憑靈次第で千變萬化し、そしてその各々が、生前のその人そっくりである場合が、何回となくつきとめられました。そんな場合には暗示説だの、潜在意識説だの、人格分裂説だのは木葉微塵に碎けます。それはその筈です。部分的の眞理が、統體的の眞理の前に影を薄くするのは、恰度日光の前で提灯の光がボンヤリするが如きものであります。

ある時ウ氏夫妻は、M夫人の家に招かれました。夫人は教養ある人で、優れたる音樂家なのですが、あまり各方面からの招待がはげし過ぎたので、神經衰弱に罹り、狂的妄語を濫發すること六週間に及び、かゝりつけの醫師の手に如何ともし難く、晝夜を分たず看護婦がつききりにしてゐるのです。

博士夫妻が行つた時には、彼女は寢臺に坐つてゐましたが、ある瞬間には棄てられた小兒のや

うに泣き、さうかと思へば恐怖の色を浮べて、『マテイラー！ マテイラー！』と呼びます。やがて又唐突にもがき争ひ、英語と西班牙語をチャンボンに怒鳴りつけます。（西班牙語は夫人の知らない言葉なのです。）

ウイックランド博士夫人はそれを見て、これは憑靈現象に相違ないと直ちに診定しましたが、幾許もなく其診定は裏書されました。夫人が肩掛を手にして、正に暇乞をせんとする瞬間に、突然恍惚状態に陥つて了つたのです。乃で夫人を音楽室の書臺の上にかき載せると、夫人は患者の軀から離れた、いろ／＼の憑靈を引き受け、かはる／＼二時間に互つて喋りつけました。

最初に現はれた憑靈の数は、すべて三個、即ちメーリといふ少女と、その戀人のアメリカ人と、その競争者のマテイラといふメキシコ人なのです。二人の若者は猛烈にメーリを愛し、従つてお互同志は、極端に憎み合ひました。かくて嫉妬のあまり、一方の男が少女を殺害すると、つゞいて二人の若者の間に大喧嘩が始まり、たうとう二人とも死んで了つたのです。

困つたことには、三人とも自分が死んだことを自覺せず、肉體が夙に亡びたくせに、依然として生前の戀と、憎みと、嫉妬とをつゞけてゐるのです。斯んな連中に軀を占領された患者こそいゝ迷惑で、彼女の靈衣の内部は、一の修羅場と化して了ひました。無論神経がしつかりして居れ

ば、通例斯んな亡靈に對する抵抗力があるのですが、神經過勞の悲しさに、飛んでもない憂目を見ることになつたのであります。

ウイックランド博士から懇々と諭されたので、三人の亡靈は、辛つと肉體の亡くなつたことを自覺し、患者の肉體から離れましたが、その中患者は寢臺から起き上り、靜かに室内を散歩しながら、驚いた看護婦に向つて、六週間目に初めて正氣な言葉をききました。

『何んだかわたしは睡くてしやうがない。今夜から安眠させてもらひます……。』
さう言つて患者は、おとなしく寢臺に戻つて、すや／＼と翌朝まで安眠をつゞけたのであります。

翌日彼女は看護婦に伴はれて、ウイックランド博士の許に入院しました。乃で博士は看護婦を歸し、服藥を止めさせ、たゞ電氣療法だけを一回試みて、食事なども他の患者と共に、食堂で攝らせましたが、むろん異状はありませんでした。

翌日更に一つの憑靈を、靈衣の中から引き出しました。それはサンフランシスコの大地震で死んだ小娘で、『暗い／＼』と言つて泣きつけました。むろんそんなのは百方慰撫を加へた上で、更に靈界の共同者に引渡して、保護をくはへてやることにしました。いかに靈界の優秀な共

同者でも、感受性の多い人間の靈衣中に絡みついてゐる靈魂を、單獨でいかんともすることができません。是非とも憑靈の性質をのみ込んでゐる人間の、側そばから手傳つてあげる必要があります。その取扱方は必ずしもウイックランド博士の實行しつゝあるヤリ方——電氣をかけて驅除した憑靈を、靈媒の軀に移して説諭する方法——のみに限るものとは考へられません。現に本邦の行者中にも、ある特殊の有効な處置を講ずる者もあります。何れが一番優秀な方法であるかは、現在に於て斷定の限りではありませんが、たゞ何れの方法にしても、靈界の共同者の力を借りずに、徹底的の仕事はできないことを私は斷言するものであります。其所に不透明な靈術——單なる暗示等に捕へられて居る、似而非精神療法の致命的缺陷が伏在します。

悪性の憑靈が驅除されるれば、病氣の根本は、それで除かれますが、むろん神経系統に加へられる大傷害の後には、餘ほどの安靜と看護とが必要です。M夫人の場合にも、すっかり回復して、家庭の日常生活に戻つたのは、それから二三ヶ月後のことだつたといひます。

爰にモ一つ、ウイックランド博士の實驗録中から、興味あるものを選出して、梗概を述べることにします。それは一九〇六年十一月十五日、シカゴでの出來事で、ウイックランド夫人は妙な亡靈につかまつて、恍惚状態になつて床上に倒れました。

漸くのこと、右の亡靈を引張り出して訊問を試みますと、何やら非常に苦しみながら、繰り返しく斯んなことを言ひました。——

『何故わたしは、もつと多量の石炭酸を飲まなかつたかしら……。わたしは早く死にたい。モウ生きてゐるのは厭だ——』

そして力なき聲で、あたりの暗いことをかこち、いくらその眞正面から電氣燈の光りを注いでやつても、矢張り暗い暗いと言ひつゞけました。又時々低い聲で『悴はドウしたかしら……。』などとも囁くのです。

更に言葉をつくして、詳しい説明を求めると、彼女の名前はメーリ・ローズと呼び、南グリーン街ストリートの二〇二番地に住んで居たといふのです。勿論其場に立合つた人達には、グリーン街が何所にあるのか、さつぱり見當さへも取れないのでした。

最初彼女は、時間の事は少しも想ひ出せませんでした。『今日は一九〇六年十一月十五日か?』と訊かれると、『いゝえ、それよりも少し前です。』と答へました。兎に角現世このよの生活は、彼女に取りて不愉快な仕事で耐らなかつたらしく、日頃慢性の腹膜炎に悩まされつゞけ、最後に毒藥を飲んで自殺の決心をしたのでした。

彼女は他の亡霊の多くと同じく、最初はドウしても、肉體的生命の破壊に成功したことを自覚し得ないのでした。肉體の死はつまり自我の滅亡——この廣く現代人に行渡れる、しかし根本的に全然一の迷信に過ぎない、心の闇に深くとざされて居たのでした。

ウイックランド博士は例によりて、諄々としてその迷妄である所以を詳しく説明し、人生の眞の目的の何であるかを懇々言ひきかせました。たうとう彼女の心眼が、初めて豁然として開けると同時に、悔悟の念が油然として湧き出で、心から神に祈禱をさしげる事になりました。

すると忽ちにして、それまでの無明の闇が破れ、朧げながらも、靈界から彼女を導くべく接近せる祖母の靈姿が、その眼に映じました。

彼女の靈魂は、斯くして救ひの綱にかゝつたのでありますが、その後靈魂の自白した所番地を調べて見ると、全くそれに相違なく、彼女の一人息子が、現に右の家屋に住んで居り、彼女はクック州立病院で、一週間以前に死亡したことが判明しました。

更に右の病院へ行つて調査すると、一層確實なことが判明しました。病院の患者名簿には、斯う記帳されて居ました。

「シカゴ市クック州立病院——メーリ・ローツ。——一九〇六年十一月七日入院——一九〇六

年十一月八日死亡。——病名石炭酸中毒。——番號三四二一〇六番。」

二、理窟ツぼい憑依靈

ウイックランド博士が取扱つた患者の中に、バアトン夫人といふのがあります。この人は靈的聽覺を有する病人で、自分に憑依してゐる亡靈達と、間斷なく喧嘩をするのです。私自身の實驗した中にも、その種のもものが數名ありました所から察すれば、精神病患者中には、案外これが多いのかも知れません。憑依して居る亡靈があるのに、之を無視して、全部を幻錯覺の所爲とのみ曲解する所に、現代精神病醫學の大缺陷が伏在して居るやに思考されます。他人の生命を預かる重大な職分を有つ方々の、眞剣な反省を切望せぬ譯にはまゐりません。

バアトン夫人の數ある憑依靈の中から、頗る判りの悪い、飽まで屁理窟をならべる女の亡靈を選び、ウ博士との問答を左に紹介します。

患者——バアトン夫人。

亡靈——カアライ・ハンティングトン。

靈媒——ウイックランド夫人。

憑依靈と多数人格現象

審査人——ウィックランド博士。

博士。あなたは何誰クニタです？

亡靈。なぜそんなことを知りたいのです？

博士。當り前ぢやないですか。あなたとは今日初めてお目にかゝるのです。初めての外來者があつた時に、その名前を知りたく思ふのは、あなただつて同一おなじでせう。

亡靈。だつてわたしは、自分から求めて、斯んな所へ訪ねて來たのぢやないですよ。誰かゞ無理に人のことを爰へ押し込んだのですよ。罪人ぢやあるまいし、ほんとに人を莫迦にして居るわ……。

博士。それはお氣の毒さまです。——が、そんな目に逢はされるについては、何か其所に然るべき理由があるのではないですか？

亡靈。理由なんかあるもんですか！ わたしは癪に觸つてしやうがありアしない。あつちへ突つつきとばされ、こつちへ引ツ張りまはされ、年がら年中死ぬ苦しみの爲續けですワ。

博士。一たいあなたは、死んでから何年におなりです？

亡靈。好かないことを仰ツしやるのね、あなたは……。わたしア死んではゐませんよ。わたしア

斯の通りピン／＼して生きてゐますよ。却つてだん／＼若くなる位で……。

博士。でも、時々變な氣分はしませんか？ 何やら自分の軀が、自分のものでないやうな場合がないですか？

亡靈。そりやアあります、何んぼわたしだつて、自分の好きな場所へ、勝手に行きたいのは山々ですのに、何やらそれが能きないのです。誰かゞ人のことをつかまへて、妙な所へ押し込め、其所そこで雷火かみなり見たいナものを打ツかけるのです。その時の厭な氣持ツたらありアしません。今にも氣絶しさうになります。モい／＼斯んな目に逢はされるのは懲々ちやうくだ……。

博士。それなら早く退けば可いでせう。あなたはあなたで一本立ちになるに限る。

亡靈。わたしは何時も一本立ちにしてゐるのに、あの女(患者を指す)の方から干涉するのです。無闇にわたしの事を逐ひ出さうとするのです。何故あの女は、あんなに威張るのでせう？ わたしだつて對等の權利があるワ。

博士。あなたの方で、先方むかしの權利を侵害して居るのでせう。

亡靈。そんな事があるもんですか！ あれはわたしの軀で、あの女の軀ではありません。わたしは何故干涉を受けるのか、更にその理由が判らないのです。

博士。先方ではあなたの利己主義なところに閉口して居るのでせう。
亡靈。憚りさま！ なんぼわたしが莫迦でも、自分の正常な権利を主張する位のことには知つてゐますよ。

博士。困りますネあなたにも……。あなたは知らぬ間に、自分の軀から脱け出して了つた幽霊で、現在一人の婦人の軀に憑りついてゐるのです。幽霊は幽霊の世界へ行くのが本當で、斯んなところでブラ／＼彷徨いてゐては困ります。

亡靈。彷徨いてゐるのですツて……。人のことを野良狗か何んかと思つてゐるのネこの人は……。博士。そんな譯の判らないことをいふから、「雷火」をかけてやらなければならぬのです。

(電氣療法のこと)

亡靈。些し位なら雷火も構はないが、近頃のやうでは、とてもヤリ切れはしない。ノベツ幕なしにガラ／＼ピシン！

博士。お望みならば、早速あいつをかけて上げませうか？

亡靈。誰れがあんなものを！ 何んな工夫でもして、二度と再び雷火などに打たれないやうにするからいゝ……。

バアトン夫人。(日頃自分を苦しめる憑依靈であることを認め)わたしはネ、お前さんには困り抜いてゐるのですよ。兎も角も名前をお名告りなさいよ。

亡靈。名前ですツて？

バアトン夫人。當り前さ。まさか名無しぢやあるまい。

亡靈。わたしの名はカアライ……。

バアトン夫人。カアライ何んといふの？

亡靈。カアライ・ハンテイングトン。

バアトン夫人。何所の者なの？

亡靈。テキサス州のサン・アントーニオ。

バアトン夫人。お前さんは、餘ツほど以前からわたしの軀にくつついてゐるのネ。

亡靈。お前さんこそ、わたしにくつついてゐるのだワ。何故さうわたしの邪魔をするのか、はつきり理由を仰ツしやい！ 妙な人もあればあるものネ……。

バアトン夫人。(躍起となり)お前さんこそ妙な幽霊だワ！ 一體お前さんの住んでゐた街は何んて言ふの？

亡霊。いろ／＼の街に住んで居たわ……。

博士。(會話を引取りて) あなたは自分の肉體を失つたことに気がつかないですか? 病氣に罹つた記憶があるでせうが……。

亡霊。わたしが最後に記憶してゐるのはエル・パアソーに住んでゐたことです。その後のことは、些ツとも覚えてゐません。其所へ行つた記憶があつて、其所から退いた記憶がないから、今でも多分其所に居るのでせう。兎に角彼所で重い病氣にかゝりました……。

博士。多分その時死んだのでせう。

亡霊。エル・パアソーから先きの事は、何所へドウ行つたかさつぱり知りません。何んでも何所かへ出掛けることは出掛けた……。たしか汽車に乗つたらしいのですが、誰もわたしを相手にするものがないので、仕方がないから、其所に居るお婆さん(パアトン夫人の事)に附いて行つた……。

パアトン夫人。その時だネ、お前さんが大きな聲で歌を唄つて、わたしを困らせたのは……。亡霊。だつて歌でも唄はなければ、人が何を言つても返事もしてくれないんだもの……。お前さんはわたしの言ふことをきかないで、汽車に乗つて、だん／＼先きへ行つて了つたぢやない

か。わたしはそれが爲めに、自分の住居や朋達から離れ、どんなに迷惑したか知れアしません。さうでせう!

パアトン夫人。さうでせうがきいて呆れる……。幽霊のくせに、一人前のことを言つてゐるから耐リアしない。

博士。(再び會話を引きとり) これ／＼カアライさん、あなたはモ些と、自分の境遇を理解せんと可けませんナ。あなたはよほど念入りに、ものゝ道理の判らない幽霊で、むろん軀などは夙に亡くなつてゐる。多分大病に罹ると同時に早速死んだのでせう。

亡霊。でも幽霊に談話ができますかい。冗談ぢやない……。

博士。幽霊でも、やり様によつては談話ができますことはない……。

亡霊。そんな莫迦なことがありますかい! 死ねば軀がそこへ轉がつてゐるぢやないか……。

博士。軀はそこへ轉がります。しかし靈魂は死ぬものではない。

亡霊。靈魂は神様の御許へ戻ります。

博士。ぢや神様は何所に居られますナ?

亡霊。天國……。

博士。天國といふと、そりア何所にありますナ?

亡靈。イエス様の所です。イエス様を捜して行けば行けるでせう。

博士。バイブルに、神は愛なりとあるぢやありませんか? さうすると神様の所在地は、寧ろ人間の胸の内部にあるのぢやないでせうか。

亡靈。知りませんよ、そんな面倒くさい事は……。とに角あの雷火が、地獄の苦しみを與へる丈

は確かです。あんなものは些ツとも利益になりアしない。わたしは大嫌ひだ!

博士。大嫌ひならバアトン夫人の軀からお退きなさい。

亡靈。あのお婆さんがバアトン夫人といふのですネ。今までは何んだかよく判らなかつたが、不思議にあのお婆さんの姿が、よく見え出して來ました。あれなら本當の人間に相違な

5。

博士。あなたは現在私の妻の軀に憑つてゐるから、そのお蔭で先方がよく見えるのです。しかしこの軀は一時の借物だから、そのつもりでゐてください。モウ直に取りあげます。

亡靈。阿呆らしい! あなたはモ些と譯の判つた人間かと思つてゐた。そんな莫迦なことができませんかい!

博士。莫迦なことぢやありませんよ。その手を御覽なさい。それが御自分の手ですかナ?

亡靈。わたしの手のやうではありませんネ。——しかし近頃はいろ／＼なことばかり起つてゐる

から、何が何だか判りアしない……。

バアトン夫人。コレ／＼カアライ、お前さんは何歳にお成りかい?

亡靈。失禮な! 婦人といふものは齡を名告るものではありません。

博士。就中未婚の年増は、齡を名告りたがらない……。

亡靈。お生憎さま! わたしはこれでも一度良人を有りましたよ。

博士。良人の名前は?

亡靈。そいつばかりは言はれません。わたしの大嫌ひな男で、あんなものゝ名前は、死ぬまで言

ひたくないです。わたしは何所までも、カアライ・ハンティングトンで通します。

博士。名前などはドウでもよいが、あなたは早く靈界へお出でなさい!

亡靈。又そんな詰らないことをお仰しやる! わたしア立派な人間で、これまでこのお婆さんと同居して居たんですよ。——それはさうと、この人に悪るい一つの癖があつて、それには弱りますワ。お婆さんのくせに餘ンまり大食過ぎるのです。ムシャ／＼物を食べて、健康になられ

ると、わたしの力量が負けて来て、始末がわるいのです。(パアトン夫人に向ひ)ネーお前さん、これから大食だけはつゝしみなさいよ。わたしがあれば食べると、これを飲んでならな
いと、いろ／＼言ひきかせるのに、些つともそれが判らないのだから、お前さんにもつく／＼
呆れますよ。

パアトン夫人。そんな下らない事を愚圖々々喋つてゐると、雷火さんを落してやるよ。冗談ぢや
ない……。

博士。雷火さんは次の室に備へてあります。お望みなら少々かけますかな。

亡霊。澤山々々！ 折角ですが、わたしならモウ要りません。

博士。おとなしく此方のいふことをきゝさへすれば、あんなものをかけはしません。たゞあなた
がいかにも没分曉で、他人の軀を借りてゐるくせに、さも一人前の人間らしい事を言つてゐる
から、始末が可けないのです。現在あなたが使つてゐるのは、私の妻の軀ですよ。

亡霊。お氣の毒さま！ わたしは今日初めてあなたにお目にかゝるのです。あなたの妻と呼ばれ
る義理は、何所にもありません。厭なことです。

博士。私の方でも、あなたを妻にする氣は少しもないのです。

亡霊。私の方でも眞平です。

博士。就いては一時も早く、私の妻の軀から退いてもらひたいのです。いつまでもあなたに妻の
軀を貸して置く譯にはまゐりません。あなたは軀の亡くなつた幽霊ですから、何卒そのおつも
りで……。

亡霊。人を莫迦にするにも程があるワ！ わたしア生れてから、まだ一度もそんな囂語をきいた
ためしがない。

博士。お前さんも随分理解のわるい幽霊ですネ。

亡霊。何つちが理解がわるいのか知れアしない。わたしアわたしの好きなことをする。あなた方
の厄介にはなりませんよ。

博士。ドウも行儀の悪い幽霊もあればあつたものだ。もツと穩しくしないと、隣りの治療室へ
連れて行つて雷火をかけますぞ！

亡霊。雷火は御免だ！

博士。それなら心を入れかへなさいよ。お前さんは、最早自分の肉體が亡くなつて居るのだか
ら、早くその事を自覺せんと可けません。私達はお前さんを氣の毒と思ふから、救つて上げよ

うとして居るのです。

亡靈。大きなお世話です。あなた方から救つて貰ふほど、盲碌はしていませんよ。

博士。餘ンまり判らないことを言ふと、私を御守護くださる優秀な靈魂達に引渡して、靈界の牢獄に放り込んで了ひますぞ。

亡靈。フン！ そんな嚇し文句なんかで、ビク／＼するわたしではありませんよ。わたしは何もわるい事をした覚えはないですよ。あなたこそ雷火なんかをかけて、人を虐めるひどい人です。わたしとあのお婆さんとは仲よしです。(バアトン夫人に向ひ) さうでせう。わたしが一度だつて、お前さんを苦しめたことはありませんネ！

バアトン夫人。何を言つてる！ 今朝も人のことを朝の三時から呼び起したくせに！

亡靈。お前さんは朝寝坊なんかしなくてもいゝんですよ。

バアトン夫人。私の眠る、眠らないはお前さんなんかの知つたことぢやないよ。圖々しい幽霊だこと！

亡靈。アラ！ 怒つてるの……。お前さんはよつぽど寝坊な性質ネ……。

博士。これ／＼カアライ、お前さんは平氣で人の邪魔をするから可けないのです。心を入れかへ

て、殊勝らしく人に救を求める氣になれば、私達の方でも、適當な方法を講じてあげるのだが……。私の妻は數十年來、お前のやうな亡靈達に騙を貸して、能る丈それ等を救済することに努力して居るのです。

亡靈。(皮肉に) 御親切さまですこと！

博士。ドウもお前さんにも困つたものだ！ いや／＼悔悛の色を見せないなら、氣の毒でも靈界の方々の御厄介を願ふより外に途がない。

亡靈。(ある幻影を見て、急に畏縮しながら) アレエツ！ そればツかりは御免……。

博士。御免でも御免でなくてもモウ駄目だ。

亡靈。ウアーツ！

(右の亡靈は餘りに頑冥不靈、とても説諭では悔悟させる望がないので、靈界の高級靈の手に引き取られて、處分されることになつたのです。)

月刊 心靈と人生

毎月一回 一日發行
定價金廿五錢送料一錢

□ 心靈の科學的研究と神靈主義の機關として斯界に君臨する唯一の特殊雜誌

□ 創立以來茲に十有八年内外の心靈事實又これに關する權威ある研究の紹介にかけて正に斯界の權威

昭和十六年十一月一日印刷
昭和十六年十一月五日發行

【定價金參拾五錢】

著者 淺野和三郎

發行者 濱濱市鶴見區北臺二三六六 淺野多慶

印刷者 東京市芝區田村町三ノ五 脇長男

印刷所 東京市芝區田村町三ノ五 診療社印刷部

不許複製

發行所 橫濱市鶴見區北臺二三六六

心靈科學研究會出版部

振替東京六三四八二番

發賣所

東京市麴町區平河町二ノ二三

心靈科學研究會事務所

電話九段(33)二三九五番

振替東京一六七六二二番

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

必讀の新刊書

淺野正恭著 (日本精神の淵源)

古事記生命の原理

四六版クロース製 二百二十餘頁
定價 壹圓貳拾錢 送料 十錢

□著者は最近十餘年古事記の研究に没頭し、自然科学を用ひて古事記一貫の原理を探窮し、以て日本國存在の意義を闡明せし、我邦古典研究史上斷然新生命を開拓したる近來稀なる名著。

□識者の精讀を希望す。

淺野和三郎著 (増補五版)

心靈講座

四六版クロース製 六百頁
特價 金參圓 送料 十八錢

〔本講座の特色〕

- (一) 講述の筆が懇切且つ直截で親しく著者の口から講話を聞く感がある事
 - (二) 材料が正確且つ新規で、現代心靈界の粹を抜いて居ること
 - (三) 着眼高邁、論斷公平で、何人をも首肯せしむること
 - (四) 死後の個性の存続、顯幽交通の可能等、人生最重要の問題が徹底的に究明されて居ること。
- 以上の四大特色を以て本書は斯界に濶歩し、既に多くの人に光明を與へ、煩悶を除かしめた、文字通りの現代の國民教科書である。

日本國民の必讀書

淺野和三郎著

日本國民の精神的指導原理

定價 金一圓十三錢
送料 金九錢

- 本書は『心靈縱橫談』の第四輯である。
- 本書の本篇『日本國民の精神的指導原理』は、故淺野和三郎氏著述中での一大論文として恥しからぬもので、全篇能く綜合的組織的體系を備へ、心靈の科學的研究、并に神靈主義が如何に我國の神ながらの道に合致せるかを説いて餘蘊なし。
- 讀者は本篇の讀破により、我が日本の有形無形の眞の姿を見出し得べきこと疑はない。殊に第七章『由緒深き國民道德』は全篇の結晶とも謂ふべく、從來、徳目の羅列のみの如き、道德の眞意義を明かにせられざる道德の根柢は本書によつて將徹に底闡明されたと云つて過言ではなからう。
- 附録に『神靈主義の結合力』外三篇を添ふ。一讀を乞ふ。

心靈寫眞

各輯 每輯四葉
各金五十錢 送料三錢

- 第一輯 (一) 淺野氏と同氏の縁戚婦人 (二) 久米博士とその令嬢 (三) アール嬢とその亡夫 (四) スミス氏とその亡妻
- 第二輯 (一) 早川氏外二名と某婦人 (二) オスホルン氏とその亡妻 (三) 幽霊の衣服の斷片 (四) 今木氏の入神寫眞

心 靈 文 庫

- 第一篇 心靈研究の栞 (五版)
- 第二篇 幽魂問答 (三版)
- 第三篇 續幽魂問答 (再版)
- 第四篇 人は死せず (上) (再版)
- 第五篇 人は死せず (下)
- 第六篇 ステツドの通信 (再版)
- 第七篇 新樹の通信 (その一) (四版)
- 第八篇 新樹の通信 (その二) (以上各冊二十錢・送料三錢)
- 第九篇 新樹の通信 (その三)
- 第二篇 個人的存在の彼方 (上) (以上各冊三十五錢・送料三錢)
- 第二篇 靈能養成法 (本篇五十錢・送料三錢)
- 第三篇 靈界の種々相
- 第三篇 二つの怪奇なる心靈現象
- 第四篇 果してウイールソンか?
- 第五篇 心靈問答
- 第六篇 再生問題の検討 (未完)
- 第七篇 諸家の心靈觀 (同) (以上各冊三十五錢・送料三錢)

必 讀 書

淺野和三郎編
岩間山人と三尺坊 ○・八五錢 送料九錢
 寅吉少年が異人によりて常陸國岩間山へ連れ行かれ、又才一郎青年が、秋葉山三尺坊に見込まれて各地に飛行した記録は日本心靈事實の双壁であります。この二篇に淺野氏の筆を以て平易明快な現代的譯を施してある。

淺野和三郎著
 照魔鏡 **心靈科學入門** 送料十錢
 改題 **國家の守護神** 送料三錢
精神統一と第六感 送料十錢
 心靈から **世界の動き** 送料三錢
 觀たる **民族の使命と信仰** 送料八錢

心 靈 文 庫

- 第一篇 心靈研究之栞 (五版)
- 第二篇 幽魂問答 (三版)
- 第三篇 續幽魂問答 (再版)
- 第四篇 人は死せず (上) (再版)
- 第五篇 人は死せず (下)
- 第六篇 ステツドの通信 (再版)
- 第七篇 新樹の通信 (その一) (四版)
- 第八篇 新樹の通信 (その二) (以上各冊二十錢・送料三錢)
- 第九篇 新樹の通信 (その三)
- 第十篇 個人的存在の彼方 (上) (以上各冊三十五錢・送料三錢)
- 第十篇 靈能養成法 (本篇五十錢・送料三錢)

必 讀 書

淺野和三郎編
岩間山人と三尺坊 ○・八五錢 送料九錢
 寅吉少年が異人によりて常陸國岩間山へ連れ行かれ、又才一郎青年が、秋葉山三尺坊に見込まれて各地に飛行した記録は日本心靈事實の双壁であります。この二篇に淺野氏の筆を以て平易明快な現代的譯を施してある。

淺野和三郎著
 照魔鏡 **心靈科學入門** 送料十錢
 改題 **國家の守護神** 送料三錢
天才養成の秘訣 送料十錢
 自己發揮 **世界の動き** 送料三錢
 觀たる **民族の使命と信仰** 送料八錢

最新刊書

浅野和三郎著

心靈學より日本神道を観る

四六版 美装 二一四頁
定價金壹圓・送料金九錢

□本書の目次は神社と祈願、祈願の意義、日本神靈主義と祭祀、再生説と古神道、國家の守護神、日本民族の使命と信仰、天孫降臨の神勅、信仰の對象、メイスン氏の神道觀につきて、靈媒の話、靈媒の取扱方につきて、筋の通らぬお國自慢、審判者の悲喜劇、神靈主義と神社問題、不徹底な祖神崇敬の十篇より成る。

□右の各篇は、相互關聯を保ちつゝ、心靈見識の下に日本の神の道を説いたもので、本書によりその幽微な秘奥が始めて闡明されたといつても過言ではない。

浅野和三郎著

歐米心靈行脚録

四六版 美装 二二五頁
定價金壹圓參拾錢・送料金九錢

□今より四十年もの昔、浅野氏はスケッチ・ブックの名譯を以て、文名を當時の讀書子間に馳せた。

□其の後氏は心靈研究に心身を捧ぐる事二十餘年。その結實が數卷の心靈著書となつてゐる。

□斯かる裡にも、氏は「世界神靈大會」に、日本神靈主義者を代表して出席するの機会を得、氏をして世界人としての名譽を荷ふに至らしめた。

□本書はその紀行文なるが、滋味津々一讀卷を蔽ふに遠なからしめ、昔ながらの浅野氏を甦らせた觀がある。又世界神靈學界の狀況を序して大勢を明らかにしめて居る等、他に類書を絶つ。

最新刊書

浅野和三郎著

心靈小品集

四六版 美装 二四六頁
定價金壹圓參拾錢・送料金九錢

□本集には小説、翻譯、創作の諸篇を收む。小説、翻譯物、共に何れも心靈的事實譚にして、所謂架空の小説ではない。而して其の事實たるや、到底人間の想像だも及ばざる怪奇に滿つ。

□一讀興味津々たるものと同時に、超現象世界種々相の一端を窺ふに足るものがある。蓋し心靈小品の名に背かざる佳什のみと謂ふべし。

浅野和三郎著

心靈縱横談

第一輯 一冊 四六版約二四〇頁
第二輯 一冊 定價金壹圓參拾錢
第三輯 一冊 送料 金九錢

□凡そ現象世界に於ける人事百般に互り、幾んど心靈學の範圍に屬すといつてもよい。故に人生の如何なる問題でも、心靈眼を以て論じ得ないものはない。

□本書は十有餘年に互れる浅野氏の透徹せる識見の結晶とも謂ふべきもので、其の方面の廣き、其の觀察の深き、蓋し得易からざる不朽の文字たるを失はず、一讀以て心の糧とするに足るであらう。

淺野 和三郎 著

歐米心 靈行脚 錄

定價 金一圓三〇錢
送料 金九錢

□今ではもう四十年もの昔になるが、淺野氏はアーピングのスケッチ・ブックの譯を以て、當時の讀書子間に文名を謳はれたものである。

□同氏はその後心靈の研究に没頭して、實驗と理論の確立に畢生の力を傾け、之に関する著書亦鮮しとせない。

□同氏の平明流麗なる筆致は、此の難問題に對してすら、能く人をしてその核心を把握せしむることに成功したのである。

□此の行脚録は、軽い氣分で筆を執り、昔ながらの淺野氏を甦らせ、更に枯淡の趣きさへ加はりて、之を單なる文學作品としても充分價值あるのみならず、其の内容には不朽に傳ふべきものがあり、漫談的旅行記などは斷然同日の談ではない。

□附録として世界神靈大會の狀況、歐米の神靈熱等を載す。彼を知り己を知るは獨り兵家のみならず、孤立獨善に陥らざらんとせば、故に又世界をも知らねばならぬ。而して是れ本書以外斷じて他に求め得ざるもの。

417

321

終